

平成24年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻2月号(通巻631号)

風土



2

寒
椿
神蔵
器

初富士を枕にしたる寝釈迦かな

読初めの「おくのほそ道」声に出て

深呼吸して大き初日を羽交絞め

妻の忌のイブや第九の鳴りづめに

月食やきのふは夏目漱石忌

短日や耳遠き日も近き日も

綿虫を追つて青空見失ふ

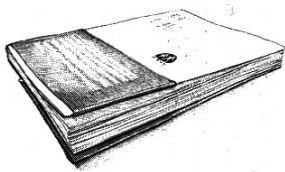
虚子ひとり上野を急ぐ寒時雨

母の涙知る柊の花咲けり

くれなゐの一花一仏寒椿

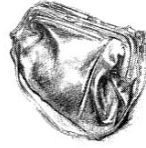
松過ぎて人情負ふばかりなり

臘梅を見ず城太郎遷化以後



竹間集

同人作品



石路の花

相沢有理子

廃線路辿るすすきに足取られ
草紅葉子のひとり言ち馬柵鎖す
ただ一度語りし暮秋源義忌
珈琲挽く店主やや老い冬に入る
再会の握手ときめく小春かな
牡丹鍋かつて生徒の髯愛し
石路咲くや海鳴りづめの貨物駅

桂郎 忌

小林輝子

まなうらにちちはは芋の煮つころがし
瓢の笛かの世の人にとどけかし
牡丹の懐あを白く闇緊むる
惜命忌一葉忌過ぐ玻璃戸かな
牡丹の冬芽マニキュアほどの朱
牡丹焚く焰は海のいろ魂のいろ
ことごとく葛枯れ谿の深くなる

雪を呼ぶ

小野寺節斤

桂郎の声に醒めゆく竹の春
神無月声を掛け合ひ足場組む
晩学の読書の秋をポランティア
たつた今八手の花を見直せり
バス停へ老女の小走り初しぐれ
冬ざれや取り壊されし屋敷跡
雪を呼ぶ雲気に見ゆるうらおもて

無 題

小林清之介

病妻に吾がぶきつちよの冬林檎
階段に添うて灯ともすクリスマス
冬北斗プラネタリウム久に見ず
葉書半面朱の落葉を貼りめぐらせ
「死思ひ出にたし」の語には答へず時雨傘
鉛筆を尖らせ並べ冬はじまる
「こんちきしよう」と二度繰返す漱石忌
「初ちやんより」

風 の 音

田村すゝむ

棒稻架の一本ごとの風の音
初紅葉して連山にへッセの詩
秋風の音の一つに湯玉噴く
神渡し「水占みくじ」古と浮く
立冬や透けて四角な喫煙所
冬暖か映しては消す電子辞書
朝毎に計る血圧冬ぬくし

空 溪 の

瀬戸 悠

馬の尾のゆさゆさパンパスグラスかな
しなやかな馬の前脚冬ぬくし
神立の蒔絵鎧の透しかな
踊り場に午前の日差し冬の蝶
しぐれふる冠鶴のかんむりに
短日の胸にかかへし乗馬靴
空溪の風のひびきや冬ざくら

冬 の 雨

塩田 博久

ガラス戸に己の顔や冬の雨
慰めて言葉のむなし帰り花
枯芙蓉思ひの多き年なりき
訂正記事書く気鬱さの冬の暮
卓に散る京の干菓子や神無月
熱燭や八十路の夢を嗤はるる
一茶忌や信濃の旅をこころざす

かいつぶり

— 宮川みね子 —

青 空 に 吸 ひ こ ま れ ゆ く 青 鷹
笠 雲 の 嶽 に か か り て 神 還 る
風 あ ら ば 草 書 と な り ぬ 冬 芒
実 南 天 三 日 を 閉 ぢ て 光 悦 寺
寒 紅 を さ し て 吉 野 門 入 り に け り
一 輪 は 吉 野 太 夫 帰 り 花
冬 わ ら び 小 さ き 日 向 の 失 せ に け り
さ ざ 波 の ゆ れ に 番 の か い つ ぶ り
か い つ ぶ り 迫 る 暮 色 に 声 こ ぼ す
雨 の 日 の 雨 の 音 き く 桃 青 忌

山河集

同人作品



神蔵器選

綿虫の意志六尺の高さかな
根岸 善行

北海道弁のじやがいも届きけり
観音の腰のひねりや小六月
枝移る小鳥見てゐる日向ぼこ
赤蜻蛉家の奥より妻の声

瞬きの一瞬にあり去年今年
天野みゆき

石路の花己れ輝く時を知る
冬耕の付かず離れず夫婦かな
枯れてより語る林となりしかな
筆勢の緩み否めず風邪心地

間島あきら

ななかまど生者列なす地獄谷
霧の夜の熱きてのひら足の先
鷹柱ぐんぐん吾を曳き上ぐる

十六夜の御殿屋台に道の川て
月夜茸不思議の国に紛れ込む

中空にあをき富士す糸竜田姫
柿沼 罌子

東京に鯖雲先に着いてをり
連れられてべつたら市の灯の中に
菰巻の高さそろふや園の松
不ぞろひの飛石つたひ花八ツ手

膳に置く茶の花一枝桂郎忌
井口 光石

海鳴りに後る預けて冬耕す
蔵と寺多き街道冬ぬくし
雪吊りの雪食ふ鳥の日和かな
青梅路や落葉の底に水の声

◇特別作品◇(抄)

長崎の月

大森 尚子

殉教の地は坂の上星月夜
流星や二十六聖人天へ地へ
唐門の極彩色や夏の果
かなかなや四石二斗の施粥釜
崇福寺十八羅漢秋はじめ
初秋や竜宮門の朱の言葉
孔子廟七十二賢人秋に入る
「宥坐之器」満ち落ちる水涼しかり
天の川行くも帰るも出島橋
長崎の月の明りの滲つくし

風土独語／神蔵 器



枯れてより語る林となりしかな

天野みゆき

東山魁夷の「風景との対話」の中で、「絵になる場所を探すという気持を棄てて、ただ無心に眺めていると、相手の自然のほうから、私を描いてくれと囁きかけているように感じる風景に出会う」とある。多くの俳人にとっても全く同じような体験・経験を持っておるのではなからうか。

作者は里山や近くのごく一般的なナラやクヌギの林であろう。葉を落ちつくした雑木林は、自らを覆うすべてを失って、風雪にあらあらしい素肌を見せて立っている。しかし、どんな木にもいのちがある。木々も落葉しつくして孤独を意識した時、暖かさを求め、人なつかしく「語る林」となる。そして木と作者が同じ気持ちになって、どちらからともなく話しかけ語り合っている。いい句はこんな時に自然に生まれる。

鷹柱ぐんぐん吾を曳き上ぐる

間島あきら

鷹柱はタカノ類、特にサシバの群が秋に南方に渡るのに先立って上昇気流をとらえて上昇する様子を言う語、多数の鳥が柱状に集まることから鷹柱といわれている。

作者、間島さんは藤枝の人であるが、今まで鷹柱を見たことはなかったそうだが、昨年の晩秋の頃、藤枝と静岡の間の宇津谷峠のさらに奥、手元の日本地図には載っていないが、わずかに標高七〇〇メートルばかりの高山^{たかね}ではじめて鷹柱を見たという。その時、同行した野鳥の会の人の話によると、鷹は確かにサシバ、およそ二五〇〇〜三〇〇〇メートル、ほとんど羽搏かず、その時は八羽であったそうだが、ゆるやかな円を画き気流に乗って上昇していた。ずうーと仰ぎ見ていた作者は、いつか頸の痛みも忘れて上昇する鷹と一緒にぐんぐん引き上げられてゆくのを実感した。

東京に鯖雲先に着いてをり

柿沼 盟子

この句はおそらく昨年秋の箱根鍛錬会からの帰途の作と思う。作者は二泊三日の鍛錬会が無事に終わり、作句に全力をつくした快い疲れとホッとした安らぎで、ふと見上げた大空にいつぱいに広がった鯖雲が眼に入ったのであろう。鯖雲は鯖雲と同じ巻積雲であるが、白雲が集まって、その段々とした波のような白斑が、ちょうど鯖が群れるようなさまをしているので鯖雲と言ひ、また鯖の背にある斑紋のような点々が並んでいるので鯖雲と言ったのである。鯖雲の方がまた魚の鱗のかがやきがあり、その日の気象状況にもよるが、ゆっくりとかつ鯖雲よりダイナミックである。

作者はその鯖雲の流れを暫くぼんやり眺めているとき、俳句のことなど考えていなかったが自然に出来てしまったのがこの句のようだ。と言っては失礼かも知れないが、本当にいい句というものはこんなものではなからうか。季語を鯖雲にしたのは確かな配慮である。

風土集



神蔵器選

木枯や毘沙門天の目を洗ふ 高槻 浅田 光代

流るる時流さるるとき百合鷗

奈良漬に酔うてかなしき小六月

泥つけてしづかに寄り来冬の鹿

綿虫に綿虫の熱手に享くる

書肆と標示す古書店秋日差 五條

上辻 蒼人

秋の蝶漂ふやうに舞ひゐたる

吊るし干すとき根も千振も

曇天に阿騎野の早き草紅葉

一方は雑木の背山初時雨

冬霧の湿り野良より持ち戻る 津山 生田 作

ひねもすの瀬音勤労感謝の日

雪来るか肩寄せてゐる墓の群

人待ちの日影は寒し花八手

日溜まりの紫蘇枯れきつて実をこぼす

初しぐれ砂にて磨く杉丸太 相模原 岡本 尚子

木の根這ふ鞍馬の山や初しぐれ

夕闇はローランサン色冬桜

膝抱けば童唄出る霜夜かな

置き去りの玩具砂場に冬めきぬ 福生

ゆりかもめ空の三角四角かな 雨宮 桂子

一花落つ観音堂の西王母

冬薔薇ことばひとつを残しゐて

冬ぬくし築地市場にこゑ飛んで

短日を押し出すやうに車椅子

木の葉髪夜叉も菩薩も胸に秘め 盛岡 石崎 浄

木地師いま木賊刈る鎌研ぎゐたり

蒲の穂の身を持ち崩し吹かれけり

手弱女の顔して大根引きゆけり

霜夜更け粉摺の音地を這へり